

| | |
|------------------|---|
| Title | 神典と日本精神(橋本増吉著, 平凡社刊) |
| Sub Title | |
| Author | 淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1941 |
| Jtitle | 史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.146(332)- 147(333) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0147 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

系として意外にも米國に最も多量輸出されてゐたが、事變後は日滿支アロックの一環として、その羊毛資源が我國に確保されたばかりでなく、支那では一番多くの埋藏量を有する鐵と、滿洲の二一四倍に達する夥しい埋藏量を持つ石炭の供給地として開發の緒につき初めること等々、今日常識として誰しも心得ておくべき事柄或は蒙疆における中央財政上の問題として指摘さるべき、

歲入補填の爲の借入金問題、阿片收入に依存する不健全性、人件費過多、蒙古王公私有土地の問題、鹽の專賣等に見られる財政政策確立と蒙人自然經濟との矛盾と云つた事項なども取上げられてゐるし、輸出統制と低物價政策が隣接せる華北の物價高により相當深刻な影響を受け、若干の困難若しくは矛盾を示しつゝあると云ふ、今日の蒙疆が當面せる最も重要な問題も明確に指摘されてゐる。

要するに本書は、著者も自ら述べられた如く、その資料に於て多少物足りぬ點もないではないが、僅々三百頁に満たぬ紙面の中によく今日蒙疆經濟全般を平明に敍述せられた點、廣く一般に推奨するに倅でない。(定價一圓)(杉本忠)

神典と日本精神 (橋本增吉著)

九十九回講演會に於て、「記紀に現はれたる日本精神」なる題名の下にしたされた講演の速記を、國史回顧會紀要第四十三號に掲載したものに基くところであり、その他の諸篇はその補遺增註の意味で論述したものである。

以下簡単にその内容を紹介したいと思ふ。

八絃一字の精神が日本精神の根柢をなすものであり、肇國以來日本民族の指導原理であることは、今日我が一億國民の搖ぎなき信念であるが、これを以て寧ろ、肇國以來今日に至る歴史の發展の過程に於て、我が國民の間に生長し來つた思想精神として認むべきものである、との見解を有するものもあるが、これは、「八絃一字」なる語が書紀にのみ記されており、古事記には全く見えてゐないことに基くのであり、ために古事記を以て後世の偽書としてこれを抹殺せんとする向もないではないが、古事記が斯る性質のものでないことは、その記事の内容からして疑ふべからざる事實であり、特に日本精神の根柢をなす八絃一字の思想精神は、その貫せる神典の物語の中に、これを確認すべき記事として現はされてゐるのである。否寧ろ八絃一字の日本精神を根柢とし基礎として神典の物語そのものが成立し組織されてゐると稱すべきものである。

「元來」國家なるものは、有機的組織としてその創設成立の當初から、その性格種類を異にするものであり、その創設の精神性格を根柢とし、基礎として、所謂國家的の活動發展を遂行するところが、即ちその國家の歴史と稱せられるものである。

建國の精神が、國家の創建後に、その歴史的發展と共に、それとのことであるが、この一篇は昭和十四年六月十日國史回顧會第

が成立し、生長するといふことは、断じて考ふべからざることである。」

而してその肇國の精神を顯現するためには、それが果して如何なるものであるかを理解し體得することが緊要であり急務である。

「しかも、今なほその信念の確立をなす能はざるにあらざるかを、思はしむるものある實情に接して、遂に默すること能はず、こゝに予が一片の衷情を披瀝して、江湖に訴へんと欲するのである。

著者の憂國の至情まことに切なるものがある。

さて次に著者は、神代の事柄は書紀よりも古事記による方が正確である所以を明にし、次のやうに述べられる。

古事記の神話に現はれてゐる思想は、天地萬物といふものは天之御中主神の御徳である産巢日之神の靈力によつて生成する（成る、生む、生るの三形式が認められる）ものであるといふ考へが基礎をなしてゐるやうに思はれるのであるが、そこに、すべてのものに家族的聯系を發生せしめる思想の根原が存するのであり、その神聖靈妙なる力を、物神一如の信念の下に、萬神萬物同族觀念の源泉としてみてゐる譯であり、それはやがて八紘一字なる日本精神の根原をなすものである。鷦鷯草葦不侶命の御子稻米命は海原へ、御毛沼命は常世の國へ渡られたといふところにも所謂八紘一字の精神といふものが現はれてゐると認むべきであり、要するに神話そのものが、斯る精神を以て作られたものであると解釋すべきであらうと思ふ。

さて八紘一字なる語が淮南子や列子に散見するところから、これを元來の日本人の考へとみることに疑を挿むるものもあるのであるが、その意義思想は彼我全く異なるものがあるのであって、前述の神話に現はれてゐるあの考へ方を有する民族に非ずしては到底生み出し得べき思想ではないと考へられる。

兎に角、神武天皇肇國の大方針として、世界といふものは一家族たるべきものであるとの御考へを御示しになつたといふことは、偉大なる事實であり、しかもそれは人類一元の理論にも合致するところである。この大方針この理論を實現することを以て、我々の理想とするところとは、日本民族の精神を最もよく顯現するものであると認むべきであらうと思ふ。

本書は二百頁足らずの小冊子ではあるが、著者の所期の目的は十分達成されてゐると思ふ。一讀をお薦めする次第である。

（漢子勝二郎）

G. Lefebvre, *Les Thermidoriens* 1937.

著者ルフニーゲル教授はソルボンヌ大學フランス革命史講座擔任者として、亦 *Les paysans du Nord pendant la Révolution Française* の著者として令名高き人。近時農民並に農業に関する卓越せる論文を發表され、A. Mathies 教授亡き後革命史研究に指導的役割を果されてゐる。本書はローマン・コート政府倒壊後所謂テルミドール派（温和派）の支配する時代（一七九四年七月より一七九五年十月）に關するユニークなる研究である。先づ第一